

再生はあり得ない。高校格差、序列化とは無縁の、あるべき高校教育像を組織的に明確にする中で、職業高校のあり方・主張を鮮明にすべきである。

- (4) ここで押さえておくべきことは、今後も中卒者数は増えない、大学進学希望は更に増加する、「大学全入」時代は目前に迫っているということである。今のまま推移すれば、高校は大多数を大学進学希望者が占める義務教育機関化する。総合学科増設に文部省が力を入れているのは、大学進学希望者を減らそうとしていると見てよいだろう。しかし、総合学科は前述のように中途半端なものでしかない。そればかりか、職業高校の位置を低くする役割を果たしてしまう。

大学進学希望者を減らすのでなく、普通科でも技術教育及び専門科目を履修させればよいのである。

- (5) ところで高卒後すぐ就職しなければならない者、専門教科が好きで中卒後すぐ学びたい者達が入学してくる職業高校を充実させなければならないのである。このことは、この人達に専門教育の機会を保障するだけでなく、地域産業にとって専門知識を吸収し得る地域センターを確保することでもある。

- (6) 「大学全入」時代は、大学卒と職業高校卒との就職での競合にはいることでもある。

大卒に負けない「力」をつけてやる必要である。また、大学入試に際して職業高校からの進学希望者には、専門科目を取り入れさせたり、入学後職業高校での学習内容を大学で継続発展させる教育内容に、大学の内容を変えさせる要求を、強力に展開すべきであろう。

B. 福祉科について

超高齢社会が目前に迫っている。にもかかわらず、「福祉」への取り組みは遅れている。いまのままでは、個人個人に高齢問題がかかってしまう。「社会福祉」に向けての教育を高校で充実させなければならない。

ところで、「福祉」は社会体制の問題であるが、日常の取り組みは地域が担うことになる。こうした日常活動に当事者である高齢者自身の参加が必要だが、若い人とりわけ青年層の参加が必要である。このように見てきたとき、全国の高校に職業科としての「福祉科」を、もっと増やす必要があるのではないか。

おわりに

職業教育が軽視され、職業高校の存在が問われている。これからの高校、大学の位置づけ、超高齢社会への推移を見通しながら存在意義を明確にすることが、緊急の課題ではないだろうか。

全教などの教育研究全国集会の報告

(高校の部)

佐々木 享

はじめに

全教、全国私教連などによる実行委員会主

催の1996年度の教育研究全国集会は、三宮を中心とした兵庫県で1月25～28日に開かれ

た。その技術・職業教育分科会に参加したので、高校分科会の特徴を工業分野を中心に報告する。提出された報告書は、工業4、農業4、商業1、職業学科に共通する問題1であった。

充実していた授業実践の報告

今年の高校分科会の最も重要な特徴は、工業、農業などの分野の授業実践の報告が充実していたことであった。

京都（工業）の荻野氏は、低学力の生徒が多いといわれて久しい定時制の電気科で、錐もみ、火打ち石など火起こしの人類史を再現する実験、モータは発電機でもあることを確認する実験など、簡単ではあるけれどもよく工夫された自作の教具を多数取り入れた授業実践を報告して、多くの参加者に感銘を与えた。近ごろの生徒は乗ってこないのではないかという危惧は杞憂であったとのこと。大阪（工業）の吉田氏は、機械科をあげて取り組んだ「課題研究」の実践を報告した。生徒の希望や自主性を尊重するよう配慮したというが、機械科第三学年にふさわしいよく工夫された製作題材が用意されており、機械科の「課題研究」の在り方に多くの示唆を与えるものであった。この討議のなかで、「課題研究」のために教育委員会が特別に予算を手当てしている県と何ら配慮しない県のあることが判明した。北海道（工業）は、機械科の「工業基礎」において、現代の工業の中できわめて重要な役割を果たしているシーケンス制御を教えた実践を報告した。

技能検定・資格をめぐる問題

技能検定や資格取得が種々の角度から話題になった。文部省が技能検定の合格や資格取得による単位（増）認定を実施するよう指導していることはよく知られているが、これに関して長野は、県教委が単位認定のガイドラインを通知してきたこと、一部にこれに呼応しようとする高校があることなどを紹介した。討論の中で長野と同じ動きのある県、特段の動きは見られない県があるなどの状況が浮かびあがった。また討論の中で岡山（工業）が報告したように、技能検定や資格取得のみでなく、公的な資格がなく技能検定がなじまない分野には技能の顕彰制度やコンクールを導入してくる動きさえある。兵庫（商）が述べたように、商業学科で全商の技能検定が日常の教育をゆがめていることは、かねてから知られている。この弊害が全学科に及ぼうとしているわけである。私たち技教研においても、この問題をきちんと討論する必要があることを感じた。

元気な農業科の実践

分科会では、職業学科をめぐる様々な悩みも語られた。困難だからこそ教師の研修が重要だとも強調された。その中で、稲づくりを一貫して重視してきたという実践や、畜産科で農場実習を重視してきたという実践など、工業科より一層困難が多いといわれる農業科から元気な報告があり、分科会の討論を終始リードしたことは大変印象的であった。

（愛知大学短期大学部）

「技術教育研究」第48号	<p>●特集1 ●高校職業教育の課題と実践の方向 高校職業学科の教育学の課題 ... 佐々木 享 高校職業教育の実践課題(1) ... 斉藤 武雄 企業内工業短大における技術教育の現状 三島 幸彦 杉並工業高校見学記 佐貫 浩</p>	<p>体で触れて味わう機械工作(座学) 大橋 公雄 養護学校での木材加工の授業 ... 板原 毅 [諸外国の技術・職業教育] 旧東独の総合技術教育のその後 . 三村 和則 [技術職業教育の動向] 高校工業科の新技術への対応 ... 長谷川雅康 ほかに内容豊富</p>
	<p>●特集2 ●技術・職業教育の授業改革 島嶼僻地の技術教育 岸田 興治</p>	<p>※頒布価 900円(〒210円) お申し込みは事務局まで</p>